

報告書

氏 名	吉田 和樹
研 修 名	カンボジアの農村地域における子どもと教員を対象とした健康教育プログラムの実施及び評価
主催団体名	公立大学法人福島県立医科大学大学院 医学研究科国際地域保健学
研 修 国	カンボジア
研 修 期 間	8月11日 ～ 8月20日 (10日間)
研 修 目 的	本研修の目的は2つである。1つ目は、カンボジアの農村地域に住む子どもを対象とした健康教育を実施し、評価する。2つ目は、教員に子どもの健康教育に関する知識を提供し、評価を行うとともに教員が認識する健康課題を明らかにする。
研 修 内 容	<ol style="list-style-type: none">1. 対象者 カンボジアの農村地域に住む子どもおよび教員2. 訪問先 カンボジアプレイベン州カンボジア日本友好学園3. スケジュール (研修期間) 2018年8月11日：移動：福島駅 (自宅) →成田国際空港 (10:50発) → プノンペン国際空港 (15:10着) 2018年8月12日：現地協力者と事前打ち合わせ (プノンペン) 2018年8月13～17日：子どもと教員を対象としたプログラムの実施 (プレイベン州) 2018年8月18日：評価アンケート等の翻訳およびデータ入力 (プノンペン) 2018年8月19日：最終打ち合わせ (プノンペン) 移動：プノンペン国際空港 (22:50発) →成田国際空港 2018年8月20日：成田国際空港 (6:45着) →福島駅 (自宅)4. 研修協力者 カンボジア日本友好学園 総責任者 Kong Vorn氏5. 研修の留意事項<ol style="list-style-type: none">1) 事前に渡航に伴う注意事項を確認した。2) たびレジに登録した。

	<p>3) 海外保険に加入した。</p> <p>4) 評価アンケートを実施するため、本大学倫理委員会の承認を得た（一般:29117）。</p> <p>5) 現地の協力者には協力を依頼し、承諾を得た。</p>
<p>研修の成果</p>	<p>1. 子どもと教員を対象とした健康教育</p> <p>本研修では、カンボジアの農村地域の子どもと教員を対象とした健康教育を行った（健康教育の様子：図 1～2）。参加者数は子ども 305 名程度、教員 37 名であった。</p> <p>子どもたちは講義と演習を通して楽しみながら参加していた。子どもを対象とした健康教育のプログラムの評価は評価アンケートをもとに分析している。また、子どもの健康を保持するためには、地域や学校で継続的に健康教育を行うことが必要であるため、教員にも健康教育を実施した。教員の評価アンケートから、健康教育に関する感想は、「現在のカンボジア人は健康のことがあまりわからないので、健康の知識の勉強はカンボジア人にとってとても大切です」「先生たちと学生は健康の知識の勉強に興味を持っている。そして楽しかったです」「講義に参加したので健康の大切な事がわかるようになりました。この事はカンボジア人の皆さんが分かったほうがいいです」などであった。このことから、教員も楽しみながら健康について学び、さらには個人だけでなく、皆が健康に関する知識を持つべきと健康を学ぶことの重要性の理解につながったと思われる。また、健康や生活に関する質問は、「カンボジア人の村の子ども達にも健康診査をしていただきたいです」「学校で健康の授業を教えてください」「毎年私は先生に健康の授業を教えてくださいたいです」などであった。このことから、教員は子どもの健康の保持増進のため、専門職への協力を求めていることが明らかになった。教員が認識する子どもの健康課題は、「田舎で勉強している子どもの病気はよく熱がある、風邪、下痢、気管支炎」「子どもを病院に連れて行ったときに多くの子どもたちはデング熱になったり、ポリオになりました」「うつ病」などであった。教員は子どもの健康課題を認識しており、健康課題の解決に向けて協力を求めているため、現地の教員が実施可能な健康教育プログラムに改訂することが必要である。</p> <p>以上のことから、本研修の目的はおおむね達成でき、健康教育プログラムの改訂の方向性も検討することができた。</p> <p>2. 研修成果の活用</p> <p>本研修の様子は、すでにニュースレターを作成し（資料 1）、看護系大学、医療機関の看護職などに配布するとともに、国際地域保健学ホームページやフェイスブックなどの SNS を活用して周知している。また、国際保健に関心がある大学院生などにも報告して意見交換を行い、教育の場でも活用している。</p> <p>3. 研修を通して見えてきた新たな課題：育児支援</p> <p>子育て中の教員から、幼児の発達・成長に関する相談があったことから育児支援も必要である可能性がある。本研修の報告の際に、農村地域で子育て中の保護者と育児の困りごとについて話し合うワークショップを開催することとなった。このことか</p>

	ら、健康教育は地域の健康課題を明らかにするための情報収集の場にもなる。
今後の取組	<p>1. 子どもを対象とした健康教育</p> <p>1) 現地の子どもや教員に報告書とニュースレターとして研修の成果を還元する。</p> <p>2) 国際保健または公衆衛生学関連の学会での報告、関連学会へ論文を投稿する。</p> <p>2. 教員を対象とした研修プログラム（健康教育に関する知識・技術提供）</p> <p>1) 教員に報告書として研修の成果を還元する。</p> <p>2) 教員が認識している健康課題から次年度の健康教育の対象・内容・方法について検討する。</p> <p>3) 国際保健または公衆衛生学関連学会へ論文を投稿する。</p> <p>3. 健康の保持増進に向けた知識・技術提供について考えるワークショップの開催 次世代を担う医療系等の学生を対象に、本研修の成果を報告し、健康の保持増進に向けた知識・技術提供について考えることを目的としたワークショップを開催する。</p>

	子ども	教員
導入 (10分)	<p>自己紹介</p> <p>演習：聴診器、計測（体重）</p> <p>講義：からだのしくみ</p>	<p>自己紹介</p> <p>演習：セルフチェック（主観的健康観など）</p> <p>講義：健康とは</p>
展開 (20分)	<p>演習：ボディーマップ</p> <p>演習：健康の保持増進のために大切にしていること（個人・グループワーク）</p> <p>講義：健康のために大切にすること</p>	<p>演習：健康課題（グループワーク）</p> <p>講義：健康のために大切にすること</p>
まとめ (10分)	<p>健康教育のまとめ</p> <p>評価アンケートの説明・協力依頼</p>	<p>健康教育のまとめ</p> <p>評価アンケートへの説明・協力依頼</p>

表1 健康教育の概要



図1 健康教育の様子（演習：成果発表）



図2 健康教育の様子（演習：体重測定）



図3 現地協力者のVirakさん

（左：吉田[保健師・大学院生]、中央：Virakさん、右：照井さん[医師・大学院生]）

